

法政就業力通信

～今月のさんぽ道～

法政大学

産学連携 3D 教育プロジェクト
<http://3dep.hosei.ac.jp/>産学連携 **3D** 教育プロジェクト

五感を研ぎ澄ませる

教授 藤村博之（ふじむら ひろゆき）プロジェクトリーダー



危険な行動を平気でする学生たち

本学の近くを歩いていると、「あっ、危ない！」と思うことがしばしばあります。学生たちの危険な行動です。向こうから来る人とすれ違うとき、後ろから車が来ているにもかかわらず、平気で道の真ん中に寄って避けようとします。良く見ると、耳にはイヤフォンがはまっています。音楽を大音量で聴きながら歩いているのですから、周りの音は聞こえません。幸い、日本のドライバーは止まってくれますから事故になることはまれですが、一つ間違えれば、ケガをするか命を落とすことになりかねません。

私たちは、常に危険と隣り合わせで生きています。ちょっとした不注意が事故につながり、その事故が元で、不自由な身体になったりすることがあります。自分で自分の身を守るしかないのに、そのあたりの意識が希薄なのが最近の学生たちです。

危険なことから身を守るには、危険を察知することが必要です。危険な状態に陥る前に危険に気づけば、危険を回避できます。その際に重要になって来るのが「五感」です。一般的には、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚を五感といいますが、ここでは「様々なことを肌で感じる」という意味で五感という言葉を使いたいと思います。

コミュニケーションには研ぎ澄まされた五感が必要

組織の中で行動するには、他のメンバーとのコミュニケーションが欠かせません。採用時点で企業が最も重視する能力の一つがコミュニケーション力です。コミュニケーションとは、相手の考えをわかろうとするプロセスです。わかってしまったらコミュニケーションは終わります。でも、人間同士、なかなかわかり合えないものです。だから、コミュニケーションは続きます。

仕事から、外国の方と英語でコミュニケーションをとる機会が良くあります。相手の発言をうまくとらえきれなかったとき、「申し訳ないけれど、もう一度言ってくれませんか？」とお願いします。そのとき、コミュニケーションの上手な方は、同じ内容を別の表現で言ってくれます。逆に、コミュニケーションの下手な方は、同じ文章をゆっくり繰り返されます。これだと、わからないという状態は解消されません。その方が使っている単語のいくつかを私が知らないために、わからない場合が多いからです。

コミュニケーションの上手な方は、話し相手の反応を良く見えています。表情や身体の動きなど、私たちはたくさんの情報を発しながらコミュニケーションをとっています。それをどれだけ受け止められるかが、コミュニケーションの上手い下手を決めます。

相手が発信している情報を受け止めるには、五感を研ぎ澄ませることが必要です。相手がいま、どのような状態にあるのか、こちらが伝えたいことをどこまで受け止めてくれているか、様々な反応を見逃さずに察知して、言葉を補ったり、説明の順番を変えたりしなければなりません。

五感を鍛える

スマートフォンを常に操作していて、誰かと会っても相手の顔を見て話さないという行動が、学生だけでなく社会人についても問題になっています。これでは五感は鋭くなりません。五感は鍛えないと鈍ってしまいます。逆に言えば、鍛えれば五感は研ぎ澄まされてきます。五感を鍛えるには、常に周囲に気を配り、肌で感じる体験を積み重ねるしかありません。せめて外を歩くときには、イヤフォンをはずし、スマートフォンを切って、周囲の音に耳を澄ませ、空気の動きを肌で感じるようにしてほしいものです。私たち大人が、そのような行動を学生に見せることが学生の五感を鍛える近道だと思います。

略歴

84年名古屋大学大学院卒
京都大学博士(経済学)。

84～89年京都大学経済研究所
助手、90～97年滋賀大学経済
学部助教授・教授。

97年～03年法政大学経営学部
教授、04年～IM研究科教授。

e-mail:

fhcdc@hosei.ac.jp

研究室は新一口坂校舎4F



略歴 70年慶応義塾大学経済学部卒。
70~06年伊藤忠商事(株)勤務、06~11
年帝京大学と法政大学職員。
11年~法政大学教員

学生は教員の背中を見て学ぶ！

特任教員 有田 五郎（ありた ごろう）

博多・大阪でキャリアカウンセラー仲間、合計100名へ法政大学のキャリア教育をご紹介する機会を得た。我々のプロジェクト取組み解説に加えて、DVD教材を使った模擬授業を行い、教員の授業取組み姿勢とそのやり方を見ていただいた。「自ら考え・自ら動ける人間を目指せ」と学生に指導しているが、教員こそが「講義を進めつつ、その場を感じ・臨機応変に対応する」ことが大切で、学生はそれを見ているのだと実感する機会であった。「講義中の言葉や動きの全てに意味があることに驚きました」という参加者感想文が、このことの大事さを改めて浮き彫りにしてくれた。

出前講義の新メニュー「働くための法律知識」

特任教員 鈴木 美伸（すずき よしのぶ）



略歴:日米ハイテク企業での営業・人事
を経て人事コンサルタントとして独立。
キャリアカウンセラー資格取得後は多く
の大学でキャリア論の講師を務める。

女子アナウンサーの新卒採用内定取消が大きな話題になっています。労働法を考えるうえでは参考になる事例なので、授業でグループ・ディスカッションのテーマにしてみましたところ過半数の学生が、内定者に問題がある、という回答でした。実際の訴訟の行方はさておき、学生の働くための法律知識が低いことに改めて気づかされました。

日本の雇用の実態は、法律よりも信頼によって運営されてきたのでこの結果は当然と言えますが、企業に余裕がなくなり、非正規雇用が3割になる昨今、最低限の身を守る法律知識は必須です。

そこで、社会保険労務士資をもつ我々のプロジェクトメンバーと「働くための法律知識」という新しい出前講義を作り、今月から授業での運用を始めました。「内定取消」「ブラック企業」「twitterの呟きで損害賠償請求」等のケーススタディ中心で、わかりやすく興味をひく内容に仕上げています。皆様のご用命をお待ちしています！

「モノ知り」の終焉！？

教育支援課長 平山 喜雄（ひらやま よしお）



法政大学法学部法律学科卒。
学務部教育支援課長

「知は力なり」とはイギリスの哲学者フランシス・ベーコンの言葉とされています。この言葉からわかるように「みんなが知らないことを知っている」ことは優位なことであり、一種のステータスでもありました。私も家族でクイズ番組を見ながら、自らの知識をひけらかして子どもの尊敬を集めるという手をよく使っていました(子どもが小さい頃は有効でした...)。「最近の学生はモノを知らない」と言われますが、今やインターネットが日常的になり、たいいていの知識は手の中のスマホでググれば(正しいかどうかは別にしても)瞬時に得ることができます。モノ知りの出番はそれこそクイズ番組ぐらいになり、その価値は下降気味です。これからの時代は「知ってる」だけではダメで、如何にして「知ってることを活用するか」が問われるのでしょう。そのためには自分の頭で考えることが必要です。そういう意味では昔から大学はただ知識を伝達する場ではなく考える場でした。もう一度原点を振り返ることも必要ですね。

◆「ジョブスタディ・コラボ・かんとう」最終日

企業と学生が本音で語り合うプログラム「ジョブスタディ・コラボ・かんとう」12/9の最終日には40大学から71名が本学会場スカイホールへ集まりました。大手企業の人事担当者および中小企業の経営者等が講師となり、前半はパネルディスカッション形式による講演と学生との質疑応答を行いました。後半の座談会では、小グループに分かれ、企業担当者と学生がより近い距離で「働くこと」について語り合いました。

◆ 編集後記：いよいよ今年もあとわずかです。師走と言われるように12月は何となくせわしい月ですが、実際も12月は結構な繁忙期で毎週土曜日にイベントごとがあります。ところで「せわしい」と「せわしない」はどっちが忙しいんだろう？さっそくググってみよう(笑)

《事務局：平山》

法政大学 産学連携 3D 教育プロジェクト (事務局:学務部教育支援課)

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL:03-3264-9520 WEB:http://3dep.hosei.ac.jp/

産学連携 **3D** 教育プロジェクト